

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第 22 回 全国大会プログラム

日 時： 2022 年 11 月 19 日（土） 10:00～17:00

場 所： 早稲田大学 戸山キャンパス 36 号館（オンライン Zoom 併用）

★受付 36 号館 6 階 9 時 30 分より

★研究発表（10:00～11:35）

	第一室（36 号館 681 号室）	第二室（36 号館 682 号室）
	司会：筑波大学 山 口 恵里子	司会：中央大学 宮 丸 裕 二
10:00 ～ 10:45	1. <i>Girl's Own Paper</i> と <i>Girl's Realm</i> における 読者の役割 城西大学 牟 田 有紀子	1. 男たちのゴシップ—『ヘンリー・エズモン ド』における『スペクテイター』に関する考察 東京大学（院） 岡 本 佳 奈
10:50 ～ 11:35	2. <i>A Handbook for Travellers in Japan</i> に見られ る小川一真の影響 津田塾大学 清 水 由布紀	2. “We are always strangers in a strange land”: Neo-Victorian Liminality in Sarah Moss’s <i>Signs for Lost Children</i> 同志社大学 諏 訪 暁

★シンポジウム 1（12:30～15:00） 36 号館 681 号室

19 世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク：Harriet Martineau を中心として

司会・報告：日本大学

報 告：青山学院大学

報 告：桜美林大学

報 告：愛知県立大学

閑 田 朋 子

梅 垣 千 尋

大 竹 麻衣子

松 本 三枝子

★シンポジウム 2（12:30～15:00） 36 号館 682 号室

ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族と＜親子分離＞

司会・報告：神戸女子大学

報 告：神戸市外国語大学

報 告：名古屋市立大学

コメンテーター：名古屋経済大学

森 本 真 美

並 河 葉 子

奥 田 伸 子

川 津 雅 江

★特別講演（15:15～16:30） 36 号館 382 号室

司会：関西大学

高 橋 美 帆

ウォルター・ペイターの「ギリシア」——神話から悲劇へ

早稲田大学

宮 城 徳 也

★総会（16:40～17:00）

司会：同志社大学

玉 井 史 絵

【研究発表】

(第一室)

1. *Girl's Own Paper* と *Girl's Realm* における読者の役割

城西大学 牟田 有紀子

19 世紀末から 20 世紀初頭、イギリス少女雑誌は読者の獲得のために試行錯誤を重ねた。毎号投書と呼びかけ、読者ページには読み手である少女たちの自主的な参加を歓迎するための交流の場を設けた。とりわけ、*Girl's Own Paper* (1880-1907) と *Girl's Realm* (1898-1915) は、そのような交流ページを、少女たちの教育や娯楽、あるいは雑誌そのものの宣伝としても活用した点が特徴的である。この二誌はそれぞれ 1900 年に慈善団体を組織して、有料会員になった読者は様々な慈善活動を行い、その成果を紙面で報告しあった。時にはどのような活動をするか、集まったお金を何に使うかも読者が決めた。この活動は、慈善活動を推奨するという当時の一般的女性教育の役割を果たすだけでなく、娯楽を織り交ぜて読者同士の勧誘を推奨するなどして読者の主体的な参加を促した。本発表では、これまで看過されてきた少女雑誌の投書や読者ページの多面的機能に着目し、単なる消費者に留まらない若い女性読者の役割を検証する。

2. *A Handbook for Travellers in Japan* に見られる小川一真の影響

津田塾大学 清水 由布紀

本論は Murray 社の *A Handbook for Travellers in Japan* に見られる小川一真(1860-1929)が携わった写真集との関係を論じる。小川は留学で身に着けた写真技術と英語を活かしてお雇い外国人達と写真集を出版した写真家で、James Murdoch (1856-1921) と共に *The Hakone District* (1892) を上梓している。これは宮ノ下から富士山に至るまでの風景の写真集だが、そのルートは *A Handbook for Travellers in Japan* 第 3 版 (1891) に掲載されたものである。筆者である Basil Hall Chamberlain (1850-1935) はこの本を所有しており、その中の地図には Murray 社のガイドブック第 4 版 (1894) の製作につながる書き込みがある。このようにこのガイドブックと写真集の間に相互関係があると見られるが、これは小川がガイドブックの発行者になっていることも関わっている。日本人写真家はその技術と人脈を使って西洋向けのガイドブックに与えた影響を検討する。

(第二室)

1. 男たちのゴシップ—『ヘンリー・エズモンド』における『スペクテイター』に関する考察

東京大学(院) 岡本 佳奈

本発表は、W.M. サッカレー『ヘンリー・エズモンド』(1852) において 18 世紀の日刊紙『スペクテイター』が男性のゴシップ媒体として果たす役割を考察する。本小説は主人公ヘンリーが腐敗した貴族社会を脱し、道徳的な家庭を得る事で幕を閉じる。18 世紀を舞台としつつ、結末には自立性と家庭を重んじるヴィクトリア朝的な中流階級男性像が確立する。この過程への障壁となるのがヘンリーの思い人、奔放なビアトリックスの存在である。物語の終盤、ヘンリーは『スペクテイター』を偽造し、彼女のゴシップを掲載する。これはビアトリックスを貶め彼自身を英雄視させるための行為だが、「スペクテイター氏」との対話を通じて女性のゴシップを広めるというヘンリーの非英雄的な人間性が露呈する。本作は男性中心主義的な傾向を批判されてきたが、ヘンリーの男性的な自我と女性に対する見解は必ずしも肯定的に描かれず、自己矛盾と偏見を孕むものとして時に批判的に読者へ提示される。ゴシップにおける対話とその偽造の意味に着目することで、本作における男性性の問題を再解釈する。

2. “We are always strangers in a strange land”: Neo-Victorian Liminality in Sarah Moss’s *Signs for Lost Children*

同志社大学 諏訪 暁

Neo-Victorian fiction refers to contemporary historical novels set in the Victorian period, and these novels aim to urge us to reinterpret, reassess, and interrogate the past. Sarah Moss’s neo-Victorian novel *Signs for Lost Children* (2015) focuses on the two protagonists’ in-between status to challenge the politics of gender in Victorian Britain. Shortly after their marriage, Ally Moberley and Tom Cavendish begin a six-month period of separation due to Tom’s work assignment in Japan as a lighthouse engineer. While Tom observes Japan from a standpoint of a foreigner, Ally works at an asylum in Cornwall as a doctor (she becomes one of the first female doctors in the UK in *Bodies of Light* [2014], a novel preceding *Signs for Lost Children*). Both Ally and Tom are described as being in a transitory state, which calls into question their identity and the nature of their marriage. Through analysing the two character’s sense of placelessness, this paper will investigate how the concept of liminality is employed in *Signs for Lost Children* to examine the social construction of gender in Victorian Britain. Also, this paper would like to argue that neo-Victorian fiction itself can be considered liminal, serving as a tool to revise the way we interpret the past and the present.

(第一室) 19 世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク：Harriet Martineau を中心として

印刷技術と流通システムの進歩と読者層の広がりを追い風に、19 世紀英国の出版業界は急速に拡大・細分化していった。2022 年に生誕 220 年を迎える Harriet Martineau (1802-76) は、このような出版文化を象徴する著作家であろう。彼女は、原罪を否定し科学と人間に大きな可能性を見るがゆえに教育を社会改革の鍵と考え、出版業界に携わる多数の知識人を輩出したユニテリアンの出身である。また女性の公領域での活動が限られていた時代に、彼女の執筆活動が経済・歴史・文学・教育・医学など多岐に渡り、著作物の発表形態も多様であることを考える上で、ユニテリアンのネットワークは看過できない。

本シンポジウムは、その先駆的存在である Anna Laetitia Barbauld (1743-1825) から論を始め、Martineau の 1850 年代までの活動を焦点として、19 世紀出版文化におけるユニテリアンの出版者と著者等の知識人仲間のネットワーク及び読者との関係性を読み解こうとする試みである。

報告 1) Anna Barbauld と出版文化：何をいかに公にするべきか

青山学院大学

梅垣千尋

この報告では、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて非国教徒の文化的ネットワークの中心近くに位置し、さまざまなジャンルの出版活動に携わった Anna Laetitia Barbauld に焦点を当てる。とくに、彼女が児童書や詩集などを実名で著した一方で、政治パンフレットや社会批評的なエッセイを筆名ないし匿名で発表していた事実に着目し、彼女が読者公衆に向けて、どのような自己呈示の仕方を望ましいものとみなしていたのか検討したい。

報告 2) *Illustrations of Political Economy* (1832-34) とユニテリアンの知的伝統

桜美林大学

大竹麻衣子

一話完結の物語形式で経済学原理の有用性を説く月刊シリーズ *Illustrations of Political Economy* は、各回の売り上げが 10,000 部に達するベストセラーとなり、無名の Martineau を一躍、国民的作家にただでなく、シリーズの影響力を見込んだ有力者が続々と彼女に交友を求めるなど、新たな出版文化を生み出した。本報告は、この作品の「新しさ」を、それ以前の出版物との隔たりよりも継承、発展という側面から捉え、とくに彼女の執筆活動の最初の基盤となったユニテリアンの知的土壌や人的ネットワークを軸に検証したい。

報告 3) Harriet Martineau と Eliza Meteyard：ジャーナルと交差する人間関係

日本大学

関田朋子

Harriet Martineau も Eliza Meteyard (1816-79) も、ユニテリアンの精神土壌において進歩的な知性を育んだ女性ジャーナリストである。1840 年代後半から 50 年代初頭にかけて、2 人は同じ複数の雑誌に寄稿し、知識人サークルにおける共通の知人も多かったが、その後、2 人が著作物を発表・出版するあり方は、大きな違いを見せるようになる。本報告では、この 2 人の作家の寄稿先を比較することで、ユニテリアンの人的ネットワークと雑誌の関係性の一角に、光を当てたい。

報告 4) Harriet Martineau と *The Westminster Review*

愛知県立大学

松本三枝子

Harriet Martineau は *The Westminster Review* を、急進派の評論誌として高く評価していた。その編者である John Chapman の周囲には、ユニテリアンに加えて、急進派の知識人がチャップマン・サークルを形成していた。1854 年に、Martineau はこの雑誌の抵当権を守るために、資金を拠出しているが、Chapman は保守的編集方針に転じて、二人の信頼関係は、1858 年には決裂してしまう。1850 年代に焦点を絞り、彼女にとり、定期刊行物とはどのような意味を持つものであったのかを明らかにしたい。

(第二室) ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族と＜親子分離＞

外で稼ぐ夫と主婦として家庭を守る妻、両親に慈しまれる子どもという近代家族モデルは、本来は白人中流階級の価値観を体現したものであったが、ヴィクトリア期イギリスにおいては本国の下層階級や帝国植民地の被支配民族、さらには解放奴隷にたいしても、家族の望ましいあり方として提示された。だがこのような周縁的階層の家族の現実とは異なり、様々な理由から多くの家族が親子の一方が不在状態となる＜親子分離＞を経験していた。

親子の別離や孤児の苦難はヴィクトリア朝文化のポピュラーなモチーフであり、家族の解体の「物語」はつねに悲劇として表象されたが、現実の周縁的階層の家族にとってそれはどのような経験だったのだろうか。本

報告は〈親子分離〉という現象とその要因としての雇用に注目し、ヴィクトリア期の家族の観念とその多様な実相について、現代にもつながる移民やエスニシティの問題も視野に入れた分析を試みる。

報告 1) 奴隷制と家族——シエラレオネと西インドの事例から——

神戸市外国語大学 並 河 葉 子

本報告では、19 世紀の英領西インドと、解放奴隷によるコミュニティが形成されていたシエラレオネにおける家族をとりあげる。両地域ともにイギリスが前提としている一夫一婦制に基づく核家族とは異なる家族関係や親子関係が一般的であったと考えられるが、実像をとらえるのは難しい。両地域の家族について、キリスト教ミッションが保管している資料などから、子どものケアを実際にはだれが担ったのかに注目して家族の形をとらえることを試みる。

報告 2) 「救済」がもたらしたもの——チャイルド・リムーバルと被支援家族

神戸女子大学 森 本 真 美

本報告では、貧困や非行のために子が施設収容や移民の対象となることで生じた〈親子分離〉に注目する。通俗小説で描かれた救済の物語とは異なり、子どもたちとその家族の状況は多様で、自らの意志や家族の判断で支援を積極的に利用した者もあれば、子の保護を不当な連れ去りとして親が抵抗したケースも少なくなかった。報告ではそのような事例の検証から、19 世紀イギリス下層労働者階級の家族の生活実態と家族観を考察する。

報告 3) 母親の移民後に——西インドに「残された」子どもたちと家族再結合をめぐる

名古屋市立大学 奥 田 伸 子

本報告は 1950、60 年代イギリスにおける女性労働者不足の深刻化を背景に、西インドからイギリスへと移民した女性とその子どもを対象とする。この時代、イギリス本国では「幼児は母親が育てるべき」とする考えが支配的であったが、西インド出身女性は子どもをおいて移民するが多かった。残された子どもの語りを通して、親子の分離と再会、それらをめぐる感情をあきらかにし、エスニック・マイノリティ女性に焦点をあてた戦後イギリス家族を考察する。

【特別講演】

司会：関西大学 高 橋 美 帆

ウォルター・ペイターの「ギリシア」——神話から悲劇へ

早稲田大学 宮 城 徳 也

以前日本ペイター協会でお話しさせていただいたおり、『ルネサンス』から、当時興味があったルーカ・デッラ・ロッピアについてお話しいたしました。発表後、ペイターのギリシア悲劇論について聞いたかったと言う感想をいただきましたが、不明にしてペイターがギリシア悲劇を論じていることも知りませんでした。ラテン詩を専攻しておりますので、ペイターと古典と言うと、『享楽主義者マリウス』に使われた古代後期の抒情詩「ウェヌスの宵宮」が思い浮かびますが、今回は上記の経験を踏まえ、『ギリシア研究』の諸論考から、エウリピデス作『ヒッポリュトス』と『バツカイ』に関するペイターの解釈の独創性を考察し、彼の「ギリシア」観の一端を整理してみたいと思います。『ギリシア研究』では、ディオニュソス、デメテルとペルセポネに関する論究も行なわれており、神話と悲劇に関するそれぞれの考察において共通しているのは、「死と再生」をめぐる宗教儀礼への関心であったと言う印象を持ちます。エウリピデスの現存作品の中でも傑作とされる二つの悲劇と関連する神話を精査して、現代の古典研究においてペイターの解釈がどのような意味を持つかも併せて考えてみます。

会場へのアクセス

地下鉄：東京メトロ東西線 早稲田駅から徒歩 3 分、副都心線 西早稲田駅から徒歩 12 分
JR 山手線：高田馬場駅から徒歩 20 分

詳細は以下の情報をご覧ください

★早稲田大学戸山キャンパスへの交通アクセス <https://www.waseda.jp/top/access/toyama-campus>

戸山キャンパスマップ



会場案内

- *周辺にはいくつかの食堂やレストランがありますので、ご利用ください。
- *当日は会場内での密を避けるため、書籍展示や休憩室での茶菓子の提供はいたしません。飲み物は各自でご持参いただくようお願いいたします。
- *会場で飲食をされる際は、周りの方との会話はお控えください。また、飲食をされる以外のときは、必ずマスクを着用してください。会場では、常に周りの方々と適度な距離を保ってくださいますよう、お願いいたします。
- *会場ではなるべく隣席を空けてご着席いただきますようお願いいたします。

○感染症予防対策へのご協力のお願い

1. 発熱や体調の不良等がある方は、ご来場を控えていただきますよう、お願いいたします。
2. ご来場の際には、マスク着用、アルコール消毒液による手指消毒、手洗い、周りの方々と適度の距離を保つなど、感染症予防にご協力くださいますよう、お願いいたします。
3. 当日、対面での全国大会への参加を希望される方は、事前にウェブにて参加申し込みをし、当日は必ず受付を済ませてください。取得した個人情報は厳重に管理し、新型コロナウイルス感染拡大防止以外の目的では使用いたしません。
4. 会場での検温にご協力をお願いいたします。

※今後の感染状況等によって、対応が変更になる場合があります。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局: 〒610-0394 京田辺市多々羅 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部

玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com HP: <http://www.vssj.jp/>